

篠崎 淳之介（しのざき・じゅんのすけ）

1、プロフィール

1955年（昭和30）劇団「雪の会」結成に参加。以来座付き作家兼演出家として活躍。津軽弁と津軽の風土にこだわった作品を数多く手掛ける。

<生没>

1932（昭和7）年3月27日～2013（平成25）年5月3日

<代表作>

脚本は「雲谷にポロ菊の花咲けば」、「陽炎の唄は遙かなれれども」など。出版は『高木恭造の青春世界』など。

<青森との関わり>

黒石市生まれ。青森市立橋本小学校、県立青森中学校、同弘前中学校、弘前高校。1956～69年青森放送に在籍。

2、作家解説

本名・原武夫。黒石生まれ。父の仕事の関係で北海道や中国・徐州に移り住み、9歳の時に青森県内に戻る。青森市立橋本小学校卒業後、旧制県立青森中学校入学。2年の時に同弘前中学校へ転校、県立弘前高校卒業。高校、青山学院大学（経済学部）時代は児童劇に関わり、1955年（昭30）、本県出身の在京大学生らによる劇団「雪の会」結成に参加。以来、同劇団の座付き作家・演出家として活躍。中でも1963年（昭38）の「お前（め）はかがやぐ虹だべが」（北津青介との共作・演出篠崎）から始まった“ツガルミュージカルス”と銘打った津軽弁による芝居は、全国的に脚光を浴びた。重厚で骨太な作風の篠崎と、軽快なタッチの北津とは絶妙なコンビであった。1973年（昭48）北津亡き後も、同劇団の脚本・演出の多くを手掛け、津軽へのこだわりは変わらなかった。1986年（昭61）の河北新報記事によると、「津軽弁による台本は、奥行きが深く、標準語では表現できない微妙なものを包含しているのでやめられなくなったというのが実感」と語っている。

また、青森演劇鑑賞協会 35 周年記念公演「じょんから万燈おんな唄」(1990) や、青森市出身の劇作家・菊谷栄の生涯を描いた、青森市文化会館 10 周年記念公演「きみ歌えたまゆらのとき」(1992)などの脚本も手掛け、「青森NOW」に「続・青森県演劇史」を連載するなど、青森の演劇界に大きく貢献した。1996 年(平 8)第 17 回青森県文芸協会賞、翌年には青森県褒賞を受賞。

1956 年(昭 31)青森放送入社、1969 年(昭 44)退社後上京してフリーライターとなり、東京の(株)メディア・アート・ラッシュ役員・プロデューサーを務めた。なお、「雪の会」の役者・牧良介は5歳下の実弟、作詞家・北見有莉は夫人である。

3、資料紹介

○『高木恭造の青春世界』

図書

1995(平成7)年9月8日

188mm×130mm

方言詩集「まるめろ」誕生に至るまでの、高木恭造の青春の軌跡を描いたノンフィクション。1995 年 10 月から 11 月にかけて「雪の会」が青森・弘前、五所川原、黒石で上演した「津軽方言詩による劇 雪幻の空ひいて」の台本も収められている。